

基調講演 1

「まちの顔づくり」

東京工業大学 教授 中井 検裕氏

基調講演ということで、私から「まちの顔づくり」についてお話させていただきますが、新庁舎の建設に当たりまして、検討委員会の方からこれを長期的なまちづくりに繋げていくことが非常に大事だというご指摘があったと聞いております。正に私も全く同感でございまして、その中で「まちの顔」、市役所は「まちの顔」とイコールというわけではないとは思いますが、それになり得る施設ということで、最初に私の方からお話させていただきます。

最初に、そもそも「まちの顔」って何だということですが、これはなかなか分かりにくいので、少し事例をお見せしながらお話させていただきます。

「まちの顔」というのは、基本的には人が集まる場所であるということが最低限と言いますか、まずはそこが出発点かなと思います。この出発点を考えるに当たって、わりと分かりやすいヨーロッパの中世都市の例をまず皆さんにお見せしたいと思います。

こちらがオランダのデルフトという街ですが、広場があり、市役所が正面にどーんと構えています。正にまちの顔らしい、顔のような場所だというのはイメージしていただけるのではないかと思います。航空写真で見ると、デルフトは堀で囲まれたまちなのですが、ここが、古い街のはじまりの場所です。ヨーロッパの古いまちの場合、鉄道はほとんど後からきているものですから鉄道駅はほとんどまちの外れにあります。ヨーロッパの古いまちの場合には大体歩いていると、地図などを見なくても自然とまちのある箇所に行き着くような、そういう空間のつくられ方がされているわけです。自然にまちをつくっていくとそういう形になるということです。

こちらは、ベルギーのブリュッセルというところですが、やはり堀で囲まれておりまして、古いまちの中心には街路、いわゆる道が非常に複雑にネットワークされており、なんとなく歩いていると、いつの間にかまちなかに来ていて、この真ん中が広場と教会や市役所がある「顔」といわれるような場所になっているということです。こういったヨーロッパの古いまちの場合は、大体自然に出来上がってきたまちが多いので、人が集まる場所というのはあまり意図的につくられているわけではなくて、自然にそういうところが出来上がっているというのがこういったまちの特徴で、つまり、まちの構造的に人が集まりやすい場所があるということです。その集まりやすい場所がどういう所かという、例えば、こういう広場ですとか、あるいは、ふたつのまちが川を挟んで両側に

あるような場合には、橋に人が集まるわけで、そういうところが人が集まる、自然に集まる場所になる。ですから、事実上は、広場のような橋のようなものになってくるのです。チェコのプラハでは、古い街道が交差しているような部分、日本では辻と呼ぶのですが、こういうところは自然に人が集まるような場所ということで、そこを「顔」の出発点としてそこを「顔」に仕立てていき、次にそういった場所に人が集まる施設を配置していったわけです。どういうものかと言うと、まずは教会、これは中世の政治世界の中心的な施設です。あるいは市場、これは日常生活にとって本当に必要な施設ということです。そして、市の自治のシンボルとしての市役所を広場、あるいは人の集まる施設の周りに配置することで「顔」に仕立てていくことがヨーロッパの古いまちの作り方だろうかと思います。人が集まる場所に人が集まる施設を配置して、更に「顔」にするために最後に見栄え、そして飾りつけをして「顔」というものをつくっていくということがヨーロッパの古いまちを見ていくと大体そういったやり方なのかなということで、最後の見栄えというところでは、例えば、飾りつけた豪華な建物で見栄えを良くする、あるいはモニュメント、シンボルのようなものをそこに設置していく。さらには、からくり人形や天文人形といった当時の科学技術の最先端のものを市民に見てもらうことで「顔」の見栄えをそこで作り上げていくということがされていたわけです。

これらはヨーロッパの中世のまちの話なのですが、実はヨーロッパの中世のまちをまとめると、人が集まる場所が自然にあって、そこに人が集まる施設を配置して、最後に見栄え、飾るということを行うということですが、なかなか近代のまちはこういうふうにはいきません。近代のまちは、例えば街路が碁盤の目状に出来ているところが少なくありません。ヨーロッパのまちのように複雑に道が入り組んでいて、なんとなく歩くといつもここに戻ってくるというような場所はありません。さらに、グリッドですね。つまり碁盤の目状でなくても日本のまちの場合、区画整理でつくられているまちが多いものですから、この区画整理もわりと碁盤の目状のまちを志向しているので、なかなか自然に人が集まる場所というのがまちの中にないのです、近代のつくられ方のまちには。したがって最初のところ（人が集まる場所）が消えると言うか、かなり弱まるわけです。そこで、こういったまちはどうやって「顔づくり」をしてくるかと言うと、まずは、人が集まる場所というのを意図的につくっていかうということになるわけです。やり方としては、伝統的にはふたつくらいあって、ひとつは街路のパターンですね。碁盤の目状になっている街路のパターンを工夫するというようなやり方であったり、碁盤の目状のひとつを抜いて広場を無理やりつくってしまうというようなやり方です。例えばニューヨークの中心ですが、完全に碁盤の目状にできているのですが、実は碁盤の目に沿わない斜めの

街路が一本入れられております。そうすると変形の交差点がそこに出来上がってきます。そこを人が集まる場所に仕立てをしていくわけですね。これがニューヨークの中心のタイムズ・スクエアのつくられ方ということになります。

あるいは、サンフランシスコのように碁盤の目状の真ん中の一角を抜いて広場状にして、そこをまちの中心、「顔」をつくるべき場所に意図的に仕上げているということなのです。

こういうやり方を日本でもしているところがありまして、北海道のまちはわりと碁盤の目状につくられているところが多いものですから、こういった中心を意図的につくろうということで、北海道の旭川では、碁盤の目のある一角を全部歩行者空間化して、歩行者モール、買い物公園と呼ばれているような空間づくりを1960年代の終わり頃に行いました（P.4）。当時としては画期的な試みで、それまで日本には元々自動車が走っていた道を歩行者専用化したというのとはなかったのです。そこを歩行者専用化、しかも8ブロックを全部歩行者専用化して買い物公園という形でこういうところをつくり、まちの「顔」として今でも旭川の市民の皆さんたちは楽しんでいるというわけです。ちなみに、冬は雪が降りますので、冬の夜はこんな感じになるのですけれども、やはりまちの「顔」というものをある意味、見栄え、飾りということも意識しながらつくられているわりと古典的な例かなと思います。

しかしながら、そういうところは日本の場合はわりと少ない例で、日本の場合はそもそもヨーロッパのような広場という文化があまりなくて、「通り」の文化なので、「通り」を中心に考えていくということ、それからまちの構造的にそういう場所がある、あるいはつくるというよりは、人が集まる施設を中心に、「顔づくり」というものを考えていくということが普通の日本の都市の「顔づくり」のやり方なのかなと思います。

では、人が集まる施設とはどんな施設かと申しますと、まずは鉄道駅です。日本では近代化の中で鉄道というものが非常に大きな役割を果たしました。また、鉄道駅には交通広場として、ほぼ例外なく駅前広場がつくられるので、人が集まる施設としての鉄道駅プラス駅前広場、こういうものがまずは人が集まる施設として考えられるわけです。とは言うものの、地方都市、特に最近の地方都市の場合には、だんだん鉄道が廃れてきています。モーターリゼーションが進展してきていて、鉄道を利用する人自体が、非常に減ってきている。さらに鉄道を利用する人が減ってきているものだから、鉄道のサービスの方もどんどん、例えば頻度が下がってくる。そうするとますます使われなくなってきて、自動車の運転免許をまだ持っていない高校生たちあるいは、ご高齢の方、そういう方々が鉄道利用者の中心になってくる。もちろんバスがありますので、バスステーション、バスターミナルといったようなものも地方都市では元々はか

なり人が集まる場所であったわけですが、こういう交通施設は、かつてのような人が集まる施設とは現時点だけを見ているとやや言いがたい面もあるということはあるかと思うと思います。

では、どういうものを人が集まる施設として考えていくべきかを申し上げますと、ひとつは、かつてのような人が集まる施設とは言いがたいが、にも関わらず、鉄道駅、あるいは鉄道とバスを結節するような交通結節拠点としての場所です。これは今後の日本の都市づくりを考えていく上では非常に大事で、特に、コンパクトな市街地のあり方、あるいは、高齢化社会の中でできるだけ便利、快適に暮らすためにはやはり交通結節拠点ということを中心に考えていくということは大変大事なことです。ここが人が集まる場所になるポテンシャルを少なくともかなり持っています。

それから、高齢化社会ですから、大規模病院というのも人が集まる施設のひとつに当然挙げられるかと思えます。さらには市役所、つまり公共施設。公共施設はなんだかんだ言っても皆さんいろいろな公共サービスを受けに来る、あるいは公務という産業自体にいろいろな産業が関連しているということもあって、やはり公共施設が人が集まる場所になるということは候補としては十分挙げられる。さらに、大規模店舗、あるいは、大規模な観光施設、こういうところも人が集まる場所、施設ということが言えようかと思えます。ただし、後で申し上げますが、例えば大規模店舗は人は集まるけれども見栄えという点ではなかなか良くない、どこに行っても同じようなものであるということによってその地域の「顔」としてこういうものをどう考えていくかというのはもう少し考えるべきところがありそうな気がしています。

さて、そういうことで日本の中でいくつか「顔づくり」に最近取り組んできた例をお話しながら、今までお話してきたようなことをもう少し詳しくみなさんにお伝えしたい思います。

ひとつ目は、兵庫県姫路市の例です。姫路は、ご承知のとおり姫路城がある場所で、姫路駅から正面に見える大変良い場所にお城があります。こちら（P.8 左上）が姫路の駅前広場です。この駅前広場が非常に老朽化し、駅ビル自体も非常に老朽化してきている。駅がそもそも老朽化してきていて駅そのものを造りかえようというのが話の発端なのですが、その時に駅前広場を見ると、姫路城の正面にありながら、ほとんどそういうものを見るような場所もないのです。ほとんどが自動車のための広場になっていて、歩行者がお城を眺めたりするような場所もない、さらに、お城がちょこっと見えるのですが、ちょうどお城の正面にこういったモニュメント（P.8 右下）が置いてあって、それが陰になってお城が良く見えないという本末転倒のような話になっていたもので、これを全面的に造りかえようということです。駅の改修については、線路が地上から上に

あがるという連続立体交差事業をやるというのがきっかけだったわけですが、かなりの年月をかけてこういった形の広場 (P.9) に造りかえた例です。駅、駅ビルが新しくなりました。ここ (P.9 駅ビルの右側) が、お城を見るための展望デッキで、ここ (P.9 駅ビル前) にサンクンガーデンという少し地面が下に下がった広場がございます。こういう広場にするためにいきなりこういう風が変わったのではなく、実はこの間に本当にいろいろな取組がされました。そこが今日私が皆さんにお伝えしたい点で、実はこれ (P.10) が最初市役所から出された駅前広場の改装案です。ご覧いただくと分かりますように、ここに少し展望デッキはあるのですが、デッキで反対に降りて行くと、市街地で、この通りの一番端っこにお城があります。良くはなっているけれど、やはり基本的にバスと自動車とタクシーのための広場であり、歩行者はやはり横に追いやられているという形になっているわけです。こういう案に対して、実にいろいろなところからいろいろな案が出されていて、これ (P.11 左上) は、商店街連合会が作った案。こちら (P.11 右上) は、地元のまちづくり協議会が作った案。これは (P.11 右下) は商工会議所がつくったこのような太鼓橋のような案といったいろいろな案がある時期、乱立していました。これを何とかしてまとめていかなければいけないということで、専門家を何人か呼んで来て、この案についての議論をして、それを市民の皆さんに聞いていただいてどこが問題で、どこをどう良くしていけばよいのかということの道筋をまずつけようということになったのです。その時に市から出されたのがこの (P.12) 3つの案です。それぞれに一長一短があります。この案を基に、専門家が数名、市民の皆さんにも入っていただきながら姫路の駅前にあります大きなショッピングセンターの1階のエントランスのところでそういう議論をインターネット中継なんかもやりながら行いました。その結果、どれも一長一短あるので、やはりどれも良くないということで専門家が出した案を基に市の方で最終的にまとめた案が今の案 (P.13) ということです。何が良くないかというと、駅から車道を渡らずにお城の方に行けるのはこの案 (P. 11 左下) しかないのですよね。これ (P. 11 右下) は渡らなくてもよいがぐるりと遠回りしなければいけない。これ (P.11 左下) だけが渡れるのだけれども、あまりにも車ばかりのレイアウトになっているのでこれもよろしくないということで最終的には市長がこういった形 (P.13) でいこうということで、一般車の乗降場はこちら (P.13 東側、西側の緑色の部分)、こちら (P.13 中央) はタクシーとバスだけという案になっていったわけです。ここ (P.13 中央) がタクシーとバスだけになるということは、この通りもタクシーとバスしか通らないということなので歩道を広げられるわけです。ここをヨーロッパというトランジットモールという公共交通と歩行者が自由に行き交うことができるような空間にできないかということで次に、道路の真ん中に島があるような

案 (P.14 A案)、これ (P.14 B-1案) はまっすぐな案 P、これは (P.14 B-2案)、まっすぐなのですが両側で歩道の幅員が違う、歩道を片側に寄せている案、あるいは、蛇行させた案 (P.14 C-1案、C-2案) など、こういうのをいろいろ考えて大きなワークショップの中で議論しながらどれが一番良いかということを考えていったわけです。さらに、サンクンガーデンという掘り込みの広場ですが、なぜ広場をつくったかという、実はこの下に地下街がありまして、地上を歩行者が行くようになるとお客さんがどんどん上を通り過ぎていってしまうため、地下街の人は困るわけです。地下にもやはりお客さんに来て欲しい。では、地下街があるのがよく分かるようにしましょうということでこういう掘り込み広場を考え、では、どういった掘り込み広場がいいのかというのをまたこういった集まり (P.15) を何度も繰り返しながら決めていったわけです。最終的にはこれ (P.16) が展望デッキであり、こちら (P.17) が展望デッキから見た正面の通りで、改修の終わった姫路城が見え、ここ (P.18) が大きな歩行者の広場になり、ここ (P.20) が掘り込みの広場で、ここから地下街に入るようになっております。上はこういった (P.19) 芝生の広場にして、歩道は (P.21)、前の歩道の場所は、ここに街灯があるのですが、これだけしかなかったのをこれだけ広げてタクシーとバスしか通らないという場所に最終的にはしていったわけです。こういう形で物事を決めていくのに実に丁寧に、専門家と市民がいろいろな意見交換をしながら決めていけるような段取りを付けていきながら、最終的な案が決まれば、今度は地元の皆さんが中心になって駅前広場をどう使っていくかという協議会 (P.23) をつくることになりました。「スローソサエティ」というところが元々中心となって行っていたのですが、地元の行政関係、民間の皆さんに入ってもらって、いろいろなワーキングを動かしながら、協議会が広場の運営を今も行っています。もちろん行政も少しは関係していますが、基本的に広場を運営しているのは協議会という形でいま使われているということです。

次は、秋田県の横手市の例です。ここ (P.26 左下) が横手駅で、駅前を再開発事業で「顔づくり」をされた例です。どうしてこういうことが始められたのかというと、駅前の大型店が空き店舗になっており、病院が老朽化して郊外に移転してしまうということにもなったのです。これ (P.27) が横手の事業前の駅前の姿で、雪が多いところですので雪があります。これ (P.28) が老朽化した病院です。老朽化しているので病院としては手狭となって郊外の方にいってしまい空地になるというわけです。空き店舗となった大型店の端にバスターミナルがあったのですが、非常に使いにくい形にもなっていました。これを何とか「顔づくり」に仕立て上げていこうということで、特に病院がなくなるということ

が地元の皆さんにとっては非常に大きな問題で、代わりになるような施設であったり、あるいはここは元々駅前であったので、ここに「顔」をもう一度しっかりつくっていきたいということで地元の皆さんが一緒になって再開発事業を始められて、こういう形 (P.30) であまり大きな規模ではありませんが、商業施設であったり、あるいは公益施設として病院ではありませんが多世代、高齢者と子どもたちが交流できるような施設、バスターミナルをつくり、住宅もつくり、というように、ここをもう一度「まちの顔」として作り上げるのだということで取り組まれた例です。これ (P.31) ができ上がった写真です。これ (P.32) は商業施設関係です。巨大ではありません。ここに巨大な商業施設は多分無理だということでそれなりの大きさの商業施設をつくられました。こちら (P.33) は公益施設で、中に子ども達が来てここで時間を過ごせるような施設 (P.34) を公共施設として入れました。こちら (P.35) は新しくつくられたバスターミナルです。そして駅はJRが改修をされたわけですが、主に駅を使うのは学生なので、駅の中にも学生達がたまるような場所がつけられていき、今はひとつの「まちの顔」ということになっています。

元々市役所や古いまちの中心はもう少し別のところ、駅から離れたところにあるのですが、駅前にもちゃんとした「顔」をつくっていかうということです。特出すべきは、病院がなくなるというところから全部出来るまで実は10年もかかっていないことです。8~9年くらいで全部をゼロからやったということで、大変熱心に取り組まれた例かと思います。

最後に、富山のお話をしたいと思います。富山はご承知の方もおられるかもしれませんが、様々な取組をされている都市でございまして、有名なのはLR Tです。路面電車をきっちりと整備されています。ここ (P.38 右上) がJR富山駅です。新幹線が開通しました。

元々の中心部は総曲輪という地区 (P.38 下方) で、お城がここに 있습니다。元々、路面電車は駅から2本出ていたのですが、ここ (P.38 点線部分) を新しくつくって環状の線にし、駅と元からの中心地を路面電車であまく周れるようにしました。その上で、それとほぼ同時と言ってもよいと思いますが、ここ (P.39) でまちの「顔づくり」をしていかうということで、大きな屋根のついた広場をつくられたわけです (P.40)。地元の百貨店の「大和」と駐車場との間に大きなガラス屋根のついた広場をつくれ、この広場を皆さんに「まちの顔」として使っていただくということです。これ (P.42) がその中ですが、広場というよりは、ある種ステージで、ここでいろいろな人が来ていろいろなことをやるようにしました。この仕組みづくりこそが「富山グランドプラザネットワーク」が非常に成功したと言われている大きな理由ということになります。施設を持

っているのは行政ですが、運営は民間にお任せして、例えば地ビールのフェアやバレンタインのイベント、あるいは大学とのコラボレーションで行う話、そして、このガラス屋根を清掃していただく結構危ないボランティアに、スパイダーマンの衣装を着せて壁にはりついているのを中から見てもらうというようなこともされながら、皆の広場である、市民皆にここを「顔」として認識してもらえるようにいろいろな試みをされた場所です。

この種の広場としてはかなり異例だと思いますが、最初の 2 年間でイベントが 210 件、351 日稼動しているということは、概ね 2 日に 1 回はそのようなことを行っているということです。当然周辺の歩行者の通行量も大幅に増え、近隣の地価も大幅に上昇し、市民の満足度も非常に上がり、かつ、富山も例に漏れず皆さん車を使って移動することが多いのですが、まちに出かけてくる回数が毎月 1 回であったのが毎週 1 回に増えたというような効果が得られているということです。

当初は民間が運営されていたのですが、そこも含めて「株式会社まちづくりとやま」が指定管理者としてこちらの運営をされています。この「株式会社まちづくりとやま」は、先ほどの「グランドプラザ」の運営、コミュニティバスの運営、あるいは、大学と連携してまちなか研究室をつくったり、これらの情報発信など様々に取り組みられています。こちら (P.47) がコミュニティバスで、こちらが富山まちなか研究室 (P.48) で大学と連携しながらされているのですが、いずれにしてもこの場所を「まちの顔」として、うまく使い続ける「顔」であり続けるということに非常に努力をされているという例となります。

さて、おわりに、今日お話したことからいくつかが私が大事だと思うことをお話したいと思います (P.49)。

ひとつ目は、人が集まる施設をつくったらそれで「顔づくり」が終わるわけではなくて、箱だけをつくっても駄目で、その箱をしっかりと「顔」のある場所に変えていくということが非常に大事で、「顔づくり」ということは実は、「場所づくり」であるということを最初に強調しておきたいと思います。「場所づくり」にするためには、姫路もそうであったように、市民が最初から「顔づくり」に関与しているということがとても大事であろうと思います。姫路も最初は「こちらが良い」、「もっと自動車をちゃんと使える広場にして欲しい」などいろいろな意見がもちろんありました。当然声の大きい人もいれば声の小さい人もいるわけですが、それをオープンな場所で何回も議論している。その中には当然専門家にも入ってもらい、東京から私も含めて何人かがお手伝いに行くというような中で、こういったものが姫路の駅を降りたところの「顔」として相応しいよねと皆さん自身がだんだん感じられて今の広場ということにつながってい

ったのだらうと思います。そういう意味では、市民が「顔づくり」に関与することとはとても大事だと思います。また、姫路もそうですし、富山もそうですけれども、「顔」であり続けるための努力がやはり必要で、物をつくったらそこで終わりではなくてその先のマネジメントが非常に大事であるということです。

二つ目は、やはり「顔」なので、見栄えのする良いものをつくらなければ「顔」にはなかなかならない。人が集まるだけでは、なかなか「顔」にはならないのです。見栄えのする「顔」をつくるということで行くと、やはりできるだけ良い場所、空間をつくり出していくということ、そして、それには実は大きな、例えば、ここを車の空間にする、こっちは歩行者の空間にするといった話だけでなく、ここにどういう樹木を置いていくか、どういう場所としてベンチを置くか、あるいは、どのようにして人に歩いてもらえるような舗装面の設えにしていくかといった細部へのこだわりがかなり大事だと思います。私は細部のデザインのことは専門外ですけれども、そちらは細部のデザインの専門家に入ってもらいながら、特に姫路の駅前を作り上げていったという経緯があります。

最後に、「まちの顔」というのはひとつだけである必要はありません。実はたくさんあっても良い。しかし、他のまちと同じものをたくさんつくってもしょうがないので、防府なら防府の「顔」をつくっていく。しかし、それはひとつである必要はなくて、たくさんあった方が良い。つまり、「顔づくり」は点なのです。まちの中のある点をしっかりつくっていき、この点を面に広げていくために「顔」同士を連携させていく。例えば駅と新しい市役所であったり、観光拠点と駅、あるいは昔からの商店街と駅であったりといった連携をすることによって、ひとつの点だった「顔」を大きな地域のまちづくりへと展開していくということが非常に大事で、そういう意味では「顔」はたくさんあっても良い。ひとつずつが見栄えが良くて映えていないといけないわけですが、それをむしろ繋げていくということが今後の長期的なまちづくりに結びついていくのかなと思います。

私のお話はここまでとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。